

## 日本語教育文法から見た「テイル」

庵 功雄（一橋大学）

## 1. はじめに—日本語学習者から見た工藤（1995）の体系—

趣旨説明で述べたように、現在の日本語学における標準的なテンス・アスペクト体系は工藤（1995）による次のものである。

表1 日本語のテンス・アスペクト体系（工藤 1995、庵 2012）

テ ン ス		アスペクト	
		完成相 (perfective)	未完成相 (imperfective)
	非過去	ル形 (- φ - (r)u)	テイル形 (- tei - ru)
	過去	タ形 (- φ - ta)	テイタ形 (- tei - ta)

表1は、アスペクトを表す「ーていー／ーφー」とテンスを表す「ーる／た」が体系をなしている事実を捉えている。しかし、日本語学習者が適切な形を産出できるかという観点からは、同じ「テイル形／テイタ形」の中にも、次のように用法ごとに難易度に差があることがわかっている（a→dの順に難易度が高まる。Cf. 崔 2009、稲垣 2013、冉 2019）。

- (1) a. 進行中・現在 易  
 b. 進行中・過去 ↑  
 c. 結果残存・現在 ↓  
 d. 結果残存・過去 難

## 2. 産出のための文法としての日本語教育文法

日本語教育のための文法記述としての日本語教育文法にもいくつかの考え方があるが、本発表では、発表者の立場からした日本語教育文法の考え方にもとづいて議論を行う<sup>1</sup>（以下、日本語教育文法という語は発表者の立場のものを指すものとして用いる）。

日本語教育文法では、学習者が適切に産出できるための記述を重視する。一方、上述のように、テイル形／テイタ形の産出しやすさには用法ごとに差がある。本発表では、産出のための文法としての日本語教育文法の立場からテイル形／テイタ形について考えていく。

## 3. テイル形の用法

本節では、テイル形の用法について述べる。

## 3.1 基本用法と派生用法

テイル形の用法は基本用法と派生用法に大別される。基本用法は動詞の意味的タイプか

<sup>1</sup> 発表者の立場からした日本語教育文法に関して詳しくは庵（2013, 2017, 2018）などを参照されたい。

らテイル形の意味が決まるもので、派生用法はそうした関係性が見られないものである。

基本用法と派生用法に属するのはそれぞれ次のようなものである。

#### 1) 基本用法

進行中：動きが知覚可能な形で存在する

(2) 雨が降っている。

(3) 公園を通ったとき、男の子が泣いていた。

結果残存：変化の結果の状態が存在する

(4) コップが割れている。

(5) この部屋に入ったとき、窓は閉まっていた。

#### 2) 派生用法

繰り返し：同一主体が繰り返す事態や複数主体によって起こされる事態を表す

(6) 太郎は最近6時に起きている。

(7) 世界では毎日数万人が餓死している。

経験・記録：過去の事態を発話時と関連づけて述べる<sup>2</sup>

(8) 彼は大学時代にアメリカに留学している。だから、英語がうまい。

(9) 夏目漱石は1867年に生まれている。

完了：ある出来事が基準時以前に起こったことを表す<sup>3</sup>

(10) 来年ここに来るときには、この工事は完成しているだろう。

(11) 私が会場に着いたとき、コンサートは始まっていた。

反事実：現実には起こらなかった事態を表す

(12) 今お金があれば、あのカメラを買っている。

(13) あのとき彼が助けてくれ(てい)なかったら、私は死んでいた。

形容詞的用法：ル形がテンス的意味を持たない

(14) この道は曲がっている。

(15) 彼は変わっている。

### 3.2 ル／タの機能

表1から、テイル形／テイタ形はアスペクトを表す「ーテイー」とテンスを表す「ール／タ」からなるが、「ール／タ」の機能は基本用法と派生用法で異なる(庵2019 予定 a)。

まず、基本用法においては、次のようになる。

<sup>2</sup> 工藤(1995)は「経験・記録」と「完了」を合わせて「パーフェクト」と呼んでいるが、これは適切ではなく、「パーフェクト」という語は「経験・記録」に限定して用いるべきである(庵2019b)。

<sup>3</sup> この「完了」は寺村(1984)の言う「完了」とは異なるものである。寺村(1984)の「完了」を「過去」の解釈の1つであるという見方については井上(2001, 2011)参照。

<進行中>

- (16) a. あつ、雨が降っている。  
b. 私が会社を出るとき、雨が降っていた。

<現在>



<過去>

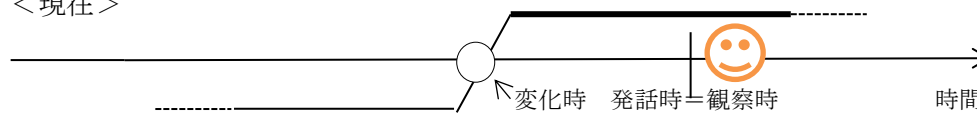


図1 観察時の違い（進行中）

<結果残存>

- (17) a. あつ、コップが割れている。  
b. 昨日この部屋に入ったとき、コップが割れていた。

<現在>



<過去>

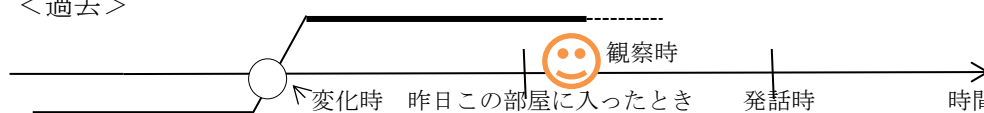


図2 観察時の違い（結果残存）

基本用法における「一ル／タ」は（進行中、結果残存のいずれにおいても）その出来事を「見た」時点（観察時）を表す<sup>4</sup>。言い換えると、過去／未来における進行中／結果残存は、現在における進行中／結果残存を過去／未来に「平行移動」したものである。

これは、基本用法が、「過去／現在／未来」の時点において、出来事を「見た」ということを述べるものであることを示している。「過去／未来」の場合は、「記憶／想像」の中で観察時に移動して出来事を「見る」ことになる。

次に、派生用法のうち、「完了」の場合は次のようになる。

- (18) 日本はマグロなど他の水産資源と同様に科学的なデータに基づいて食料として持続的に利用できるよう訴え、今年9月のIWC総会では資源量が豊富なクジラの商業捕鯨を再開するよう提案した。ところが反捕鯨国は「いかなる捕鯨も認めない」と宣言し、反対多数で否決された。

日本は「IWC 締約国としての立場の根本的な見直しを行わなければならない」と反発。これまで脱退も含めた対応を検討していた。自民党内でも捕鯨推進を掲げる議員から、IWCからの脱退を求める強い要請が政府に出されていた。

（日本経済新聞 2018.12.26）

<sup>4</sup> 便宜上「見る」と書くが、五官で知覚できるもの全てを含む。

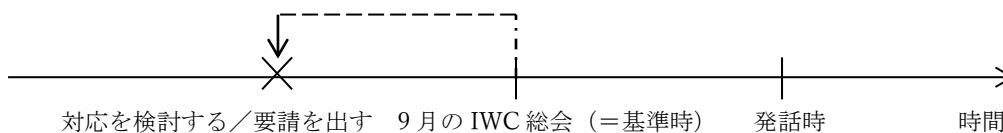


図3 完了における時間関係

「完了」における「ール／タ」は「基準時」を表し、「ーている（だろう）／ていた」全体は、「未来／過去」の「基準時」以前にある出来事が起こったことを表す。

「ール／タ」が観察時を表すか基準時を表すかは次の例を比較するとわかる。

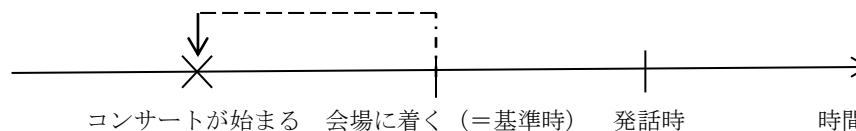
<進行中・過去>

(19) 私が会社を出るとき、雨が降っていた。(= (16b)) (タ=観察時)<sup>5</sup>



<過去完了>

(20) 私が会場に着いたとき、コンサートは始まっていた。(= (11)) (タ=基準時)<sup>6</sup>



#### 4. 日本語のテンス・アスペクト体系と英語のテンス・アスペクト体系の比較

本節では、以上を踏まえて、日本語と英語のテンス・アスペクト体系を比較する。

##### 4.1 対応の仕方

上記の例を用いて、日英語の対応の仕方を考えてみる。

(19) 私が会社を出るとき、雨が降っていた。<進行中・過去>

継続 観察時

It was raining when I left my company.

(20) 私が会場に着いたとき、コンサートは始まっていた。<過去完了>

以前 基準時

<sup>5</sup> 「進行中」では「ーテイー」は「継続」を表す。観察できるのは継続中の事態に限られるため、次のようには言えない。

(19') \*私が会社を出るとき、雨が降った。

ただし、事態を瞬間的にすれば観察できるようになるので、次の言い方は可能である。

(19'') 私が会社を出るとき、雨が{降り出した／降り始めた}。

<sup>6</sup> 「完了」の場合、「ーテイー」は「以前」を表す。したがって、次のように（「ーテイー」を省いて）言くと、事態が基準時と同時に起こったことを表す。

(20') 私が会場に着いたとき、コンサートは始まった。

The concert had started when I arrived.

注 5, 6 で見たように、(19) では「-テイー」が「継続」、「-タ」が「観察時 (過去)」を表し、(20) では「-テイー」が「以前」、「-タ」が「基準時 (過去)」を表す。ここで、「継続」が「be-ing」、「以前」が「have-ed」に対応すると考えると、(19) では「be+ (観察時) 過去→was」、(20) では「have+ (基準時) 過去→had」となり、それぞれの用法において日英語は形態素レベルで 1 対 1 対応すると見なせる。

#### 4.2 反事実

一方、反事実 (英語の仮定法過去/仮定法過去完了) の場合は次のようになると考えられる (庵 (2019 予定 b)、Iori 2014)。

(21) あのとときお金があつたら、そのカメラを買っていた。

(22) I would have bought the camera if I had had enough money.

すなわち、(21) の主節は「過去」よりも 1 つ前の時間 (過去完了) を表している ((21) の「-ていた」は (20) と同じ「過去完了」である)。これは (22) の主節と同様であり<sup>7</sup>、これが「-ていた」が反事実・過去を表せる理由であると考えられる。なお、日本語の場合、反事実の解釈が可能になるためには「タラ節/バ節」の存在が必須である<sup>8</sup>。

#### 4.3 日英語の対応

以上を踏まえて、日英語のテンス・アスペクト体系を比較すると、次のようになる (庵 2019a、2019b、Iori 2018)。

---

<sup>7</sup> (22) は直接法なら "I bought the camera." となり、"buy" は「過去形」になる。つまり、"(would) have bought" は直接法の時制より「1 つ前」の時間を表している。

<sup>8</sup> 英語の場合、(22') は条件節を欠いても反事実の解釈になるが、日本語の場合、条件節を欠いた (21') は反事実とは解釈できない (解釈できるとすれば、(直説法の) 過去完了である)。

(21') 私はそのカメラを買っていた。

(22') I would have bought the camera.

これは、英語には法助動詞 (modal auxiliary verb) が存在するのに対し、現代日本語にはそれが存在しないためであると考えられる (庵 (2019 予定 b)、Iori 2014)。ただし、古典語の「む」などは接続法 (仮定法) を表していたと考えられる (尾上 2004)。

表2 日本語のテンス・アスペクト体系（基本用法）

	完成相	未完成相 imperfective			ー ル / タ
	Perfective	対立なし	進行中	結果残存	
	非状態動詞	状態動詞	非変化動詞	変化動詞 移動動詞	
未来	ーる	ーる	ーているだろう	ーているだろう	観察時
現在	×	ーる	ーている	ーている	
過去	ーた	ーた	ーていた	ーていた	

表3 英語のテンス・アスペクト体系（基本用法相当）

	完成相	未完成相		
	非状態動詞	状態動詞	進行中	結果残存
			非変化動詞 移動動詞	変化動詞
未来	will+原形	will+原形	will be+現分 <sup>9</sup>	will be+過分 <sup>9</sup>
現在	×	現在形	is <sup>9</sup> +現分	is+過分
過去	過去形	過去形	was <sup>9</sup> +現分	was+過分

一方、派生用法について日英語を比較すると次のようになり、両者は、「現在完了」と「繰り返し・過去」を除き、ほぼ1対1に対応することがわかる<sup>10</sup>。

表4 日本語のテンス・アスペクト体系（派生用法）

	繰り返し	経験・記録（パーフェクト）	完了	反事実	形容詞的	ー ル / タ
未来	×	×	ているだろう	×	（ている）	基準時
現在	ている	ている	（た） <sup>10</sup>	ている	ている	
過去	ていた	×	ていた	ていた	ていた	

\*反事実の場合、従属節（バ節/タラ節）が必須

表5 英語のテンス・アスペクト体系（派生用法相当）

	繰り返し	パーフェクト	完了	反事実
未来	×	×	will have+過分	×
現在	現在形	have+過分	have+過分	would+原形
過去	used to+原形	×	had+過分	would have+過分

<sup>9</sup> 現分：現在分詞、過分：過去分詞、is：Be動詞現在形の代表形、was：Be動詞過去形の代表形

<sup>10</sup> 本発表では「現在完了」の扱いを保留するが、庵（2015）の議論が正しければ、ここでも日英語は形態素レベルで1対1に対応すると言える。

### 4.3 対応しない部分

表 2~5 からわかるように、日本語と英語のテンス・アスペクト体系は形態素レベルでほぼ 1 対 1 対応をしている。ただし、以下については対応していない。

#### 1) 結果残存

最もズレが大きいのは、結果残存の場合であると考えられる<sup>11</sup>。

(23) コップが割れている。

(24) The glass is broken.

(23) の「割れている」が動詞の派生形であるのに対し、(24) の”is broken”は形容詞であると考えられる。

#### 2) 移動動詞（位置変化動詞）

日本語では移動動詞（位置変化動詞）のテイル形は原則として移動中を表せない。例えば、(25) は（太郎が東京在住とした場合）太郎が今飛行機／新幹線などに乗っているという解釈を持たない。言い換えると、(25) は (26) のように解釈される。

(25) 太郎は大阪に行っている。

(26) 太郎は大阪に行った+（太郎は）今大阪にいる

一方、英語の (27) は移動中を表すため、学習者は (25) を (27) と解釈しがちである。

(27) Taro is going to Osaka.

### 5. おわりに

本発表では、表 1 で表される工藤（1995）の体系を日本語母語話者に対する日本語教育文法の観点から批判的に検討し、日本語では、(28) で表される形態・統語的手段を用いて、英語で表されているテンス・アスペクト体系をほぼ全て表していることを明らかにした。

(28) a. 「-ティー」の有無と存在する場合のその解釈（継続／以前）

b. 「-ール／タ」の解釈（観察時、基準時、恒時<sup>12</sup>）

c. 従属節の有無

表 2~表 5 の対応関係の指摘は、日本語教育の観点からは、日本語とヨーロッパ語（的テンス・アスペクト体系の言語）との対照を容易にする（英語とその言語の違いを考えればよくなる）という価値を持つ。さらに、中国語のようなテンスが文法カテゴリーではない言語と日本語の関係を考える際にも役に立つと思われる。さらに、(28b) の「-ール／タ」の解釈の違いなどは一般アスペクト研究においても価値を持つものと考えられる。

---

<sup>11</sup> なお、現代日本語の共通語のように進行中と結果残存が同一形態であることは（少なくとも日本語学習者が多い言語においては）例外的であり、日本語のテイル形の結果残存用法は多くの日本語学習者にとって習得が困難なものの 1 つである（cf. 崔 2009、陳 2009、トッフオリ 2017、冉 2019）。

<sup>12</sup> 「繰り返し」と「形容詞的用法」のテイル形における「-る」は特定の時点を指していないので、恒時（tenseless）と解釈できる。

## 参考文献

- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 (第2版)』スリーエーネットワーク
- 庵功雄 (2015) 「現代日本語におけるテンス・アスペクト体系についての一考察」第141回関東日本語談話会発表要旨
- 庵功雄 (2017) 『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
- 庵功雄 (2018) 『一歩進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
- 庵功雄 (2019a) 「意味領域から考える日本語のテンス・アスペクト体系の記述」『言語文化』55、一橋大学
- 庵功雄 (2019b) 「テンス・アスペクトの教育」庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す1 「する」の世界』ひつじ書房
- 庵功雄 (2019 予定 a) 「現代日本語のムードを表す形式についての一考察」庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す2 「している・した」の世界』ひつじ書房
- 庵功雄 (2019 予定 b) 「現代日本語のテンス・アスペクト体系におけるテンス表示部分の機能について」庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す2 「している・した」の世界』ひつじ書房
- 庵功雄・清水佳子 (2016) 『上級日本語文法演習 時間を表す表現』スリーエーネットワーク
- 稲垣俊史 (2013) 「テイル形の二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」『中国語話者のための日本語教育研究』4、日中言語文化出版社
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』ひつじ書房
- 井上優 (2011) 「動詞述語のシタの二義性について」『国立国語研究所論集』1、国立国語研究所
- 尾上圭介 (2004) 「第1章 主語と述語をめぐる文法」尾上圭介編『朝倉日本語講座6 文法II』朝倉書店
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 崔亜珍 (2009) 「SRE 理論から見た日本語テンス・アスペクトの習得研究」『日本語教育』142
- 冉露芸 (2019) 「文法教育における母語転移の研究—中国語話者のアスペクト・テンスの習得における発達パターンに着目して—」2019年度一橋大学言語社会研究科博士学位請求論文
- 陳昭心 (2009) 「「ある/いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」」『世界の日本語教育』19
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- トッフオリ・ジュリア (2017) 「ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果残存のテイルの使用傾向に関する一考察」2016年度一橋大学言語社会研究科修士論文
- Iori, Isao(2014) “Notes on the Subjunctive Mood in Modern Japanese”, *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*. 55-1, 一橋大学
- Iori, Isao(2018) “A Comparative Study of the Tense-Aspect System between Japanese and English: As a Basis of “Pedagogic Grammar of Japanese Using Learners’ Knowledge of their Mother Tongue”, *Hitotsubashi Journal Arts and Sciences*. 59-1, 一橋大学